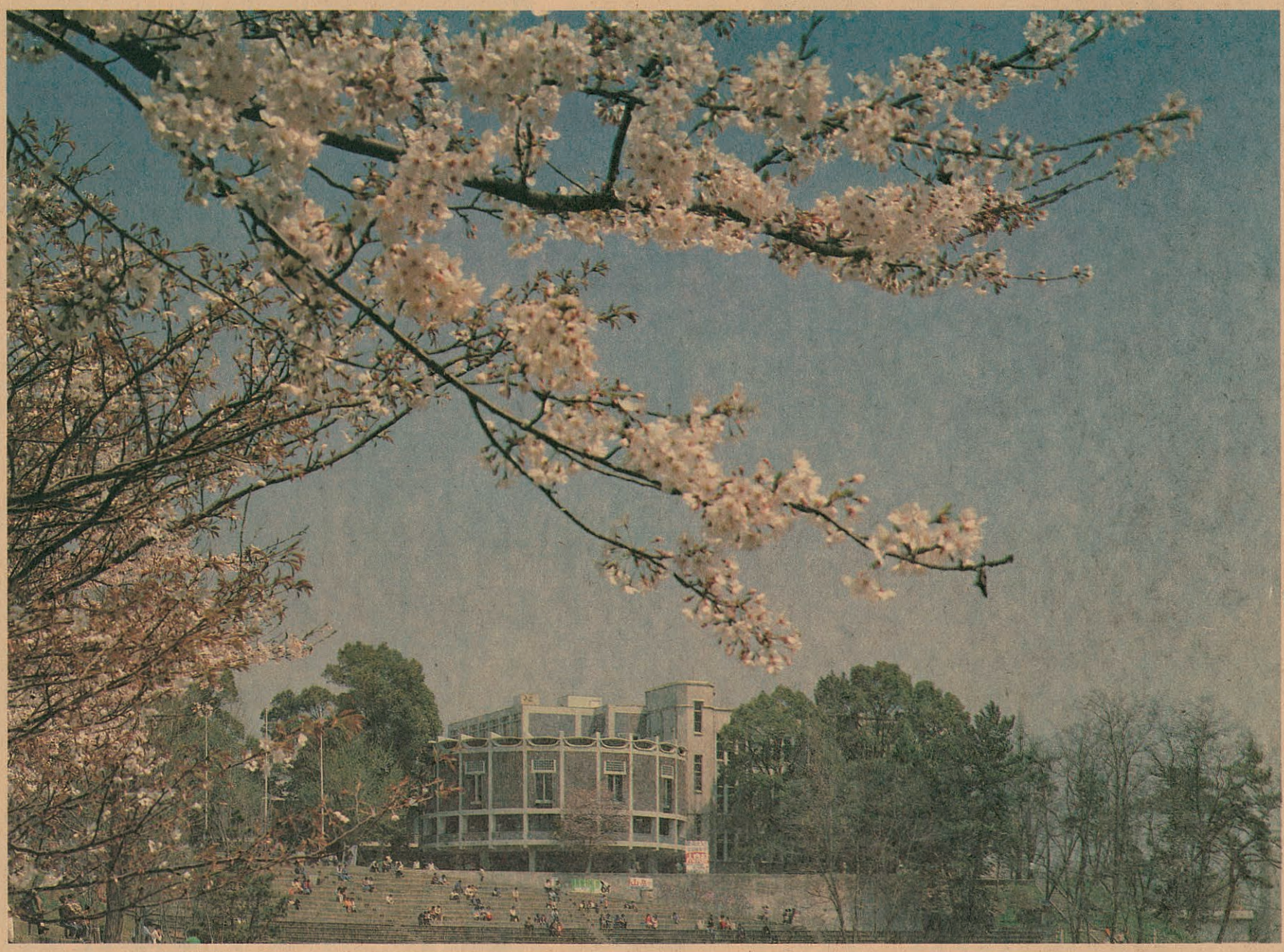
第100号

THE KANSAI UNIVERSITY NEWS

関西大学通信

関西大学広報委員会
大阪府吹田市山手町3丁目



新入生諸君へ

学長　大西昭男

「かくてはたちあまりなりしほど、学問しにとて、京になんのぼりける」（玉勝間）

こうした気持ちをもって、わが関西大学にと、諸君は入学してこられたことでしょう。まずはおめでとう。諸君一人ひとりの手をとって、おめでとうと申しあげたい。

二カ月前の受験がひとつの厳しい節目としての通過儀礼であるとすれば、今日の日もまたひとつの節目における儀式でしょうが、長い人生における目標ということから言えば、もとより「入学」はあくまで仮りの目標に過ぎないでしょう。「卒業」とてまた然り。しかし、つい最近までの〝努力〟とか〝必勝〟とか大書された壁の文字を眺めながらのあの受験勉強なるものから解き放たれ、ここ千里なる、また天六なる、自由の伝統あふれる学園での四年間の生活に向けて、いささかの緊張を感じながらも、すでに精神の屈伸運動を開始しているであろう姿を思います。われわれもまたこの時に、自らの学問の初心に立ち戻ることができるのです。

「初心不可忘」とは折につけ引かれる言葉です。世阿弥はこの一句にいかなる意味をこめて用いたものでしょうか。「是非の初心を忘るべからずとは、若年の初心を忘れずして、身に持ちてあれば、老後にさまざまの徳あり」と続ける世阿弥の言葉の中の「是非の初心」については、幾つかの注釈を顧みた上で、江戸時代の儒者に学び、「疑を存す」としつつも、「若年の初心」を諸君のうちに見出しているが故に、この「初心忘るべからず」の一句は、たとえ通俗的な意味に受け取られようとも、私の好きな句であり、新入生諸君に贈るにふさわしい言葉であろうと思います。

学問への初心の有無は、いまこの日に問うことはいたしません。しかし、大学入学のこの日を機に、一度立ち止って、自らの胸のうちをのぞきこんでほしいのです。これまでのような外から与えられたものでなく、自分から知りたい、学びたい、究めたい、といういわば学を志す者の、ひいては人たるものの本来もつ願いが、さらには渇きに似たものが、その奥底に潜んではいないでしょうか。あるいはただ潜んでいるばかりか、すでにして蠕動を始めてはいないでしょうか。諸君の先輩たちの多くによって必ずしも裏切られはしなかったように、諸君の胸の奥なるその精神の蠕動に、私はいま夢をかけているのです。

そのような心の中の微かな動きを感じたなら、何はともあれ、まず〝学〟の先輩に、先達に問いかけ、そこから学んでみることを始めるべきでしょう。たとえば一冊の書物を開いてほしいのです。そこには、ひとたび何かのきっかけをつかめば、その場で猛烈な好奇心によって知的意欲を奮いたたし、そこから確固たる志が育ってゆくような可能性が生まれましょう。それは冒頭の「はたちあまりなりしほど」の先賢とはあと先が逆になっただけのことと思うこととし、ともかくも、「学問しにとて」京に上るまでの玉勝間の著者・本居宣長が通った道を、ここ千里、あるいは天六に到着してから大急ぎで通ってもらいたいのです。さすれば、いつかは追いつく可能性もあろうというもの。しかし、この可能性も、準備運動の今という機を逸しては手遅れにもなりかねません。

よく言われることですが、友を得ることを以て、大学生活の大きな意義のひとつに数えあげることがあります。よき友を得ることは何より尊いことであると思います。ですから、ここで英国十九世紀文壇の異端者であるサミュエル・バトラーの尻馬に乗って、友はもっぱらうるさいものとし、本の方は理不尽なことも言わず、しつこくつきまとうこともないような友であるからといって、ただ読書のみを推奨するつもりではありません。ただ、友とは、それを作ることを目的に大学生活を送るといったものではなく、いつの間にか出来るようなものでしょう。一方、読書の習慣、能力、楽しみは、自らの知力と能力によって、自身で育ててゆかねばならない類のものであり、もとより努力が必要でしょう。しかし、その試みのうちには、ただ一冊の本が、あるいは半頁一頁の、さらには一句半句の言葉が、未知の世界を、あるいは無限の世界を啓示してくれることもありましょう。それは、その人にとってまさに運命的な出会いになろうというものです。もっとも、ただの一句半句であっても、それを正確に、精密にかつ繊細に読み取ることは容易ではありません。単に読み終えたとせずに、疑うこともまた必要です。疑いが解けないなら、「疑いを存す」と銘記しておくべきです。そして、そこから、何度も立ち戻ってみること。さればこそ初心忘るべからず。

ある機縁でこの大学に集まった諸君は、初めに言ったように、確かにひとつの目標を果たしたとは申せます。自由を得たとも言えます。であればこそ、今後は節目ごとに、諸君の一人ひとりが、自分自身の手で仮りの目標、暫しの理想を設定しながら、ついには自分にとっての真実の目標を求め、自身の理想を追っていってほしいものです。そして、「関西大学にやってきた」この出会いをきっかけとして、今後のさまざまな出会い、とりわけ学問との出会いを通して、これまで曖昧模糊としていた思いの中に、明確なひとつの〝志〟が生まれ、学に向かうことこそ、大学生活において何よりも得がたいものと感得することができましょう。

千里眼

かのN・E・Dの主編者ジェイムズ・マレーの伝記がその孫娘の手に成り、日本語訳を通してわれわれにも容易に、偉大な辞典編纂者の一生を知り得るようになった。K・M・エリザベス・マレー著、加藤知己訳『ことばへの情熱』（三省堂）がそれ。残り頁の減るのを恐れつつ、夜を徹して読了▼独学者にまつわるあのいわれない差別と辛酸、早く生まれ過ぎた先駆者につきものの追いつめられた義務感と孤独、英国の学界での資格を有さぬ者の苦しみと何より経済的困難の中で、学たる地位を認められぬ英語の大辞典を編纂。完成を目前に逝く。彼を終始支えたのは神への信仰と共に、ことばへの情熱である。だが物事は情熱だけでは成就するまい。何より学識と知識が必要▼ところでよく言われる「単なる」知識、発見、また「物識り」などという一種軽蔑のニュアンスを伴うことばがある。また「単なる」技術あるいは雑学に「過ぎぬ」などとも。しかし、発見と知識と技術などとはそれのみでも貴重。あるいはそれらこそ重要ではないか。少なくとも知識の多寡は、新たな発明への可能性を育すはず。自分の手で情報を集め、自身の頭で選択し、練り上げ、整理する技術を大学生活の中で磨いて欲しいもの▼知識の少なさは、ともすれば柔軟な思考を妨げられて余裕の無くなることもある。あるいは一般教育科目、外国語が必要とされる所以でもある。答えが単一でないと不安なあの入試のための「勉強」と違い、複数の考え方、時には相反する立場に立って思考する術も学ぶべき。『新英語大辞典』の話をするつもりが、途は逸れて説教くさくなってしまった。ともかく「雑学」のすすめである。

（T・K）

人事異動

四月一日付で次の先生方が昇任された。

▼法学部▲
助教授　竹下　賢
同　真鍋　俊二
専任講師　大沼　邦博

▼文学部▲
教授　田中　欣和
同　豊永　彰
同　中山智代市
同　二宮　まや
同　平田　重和
同　福岡　四郎
助教授　内山　勝利
同　関屋　俊彦
同　野村　幸正
同　平田　渡
専任講師　谷口　義則

▼経済学部▲
教授　橋本　昭一
同　安喜　博彦
助教授　鵜飼　康東
同　毛島　達雄

▼商学部▲
専任講師　杉野　幹夫
同　高尾　裕二

▼社会学部▲
助教授　東村　高良

▼工学部▲
教授　小松　伸也
同　藤村　侯夫
専任講師　堀井　健

新任教員紹介

4月から新しく次の先生方が本学に就任された。

法学部　助教授　若田恭二
……間、関西学院大学大学院の……

法学部　助手　市原靖久
……身である。本学大学院を……四月助手に就任。抵抗権……史をその根源にさかのぼ……かにするという実証的研……されている。性格は……味は絵画鑑賞。エコール……キスリングを愛す。……さとが調和している人柄……

法学部　助手　大和正史
……れ。……十一年卒）・修士課程（五十三年修了）の六年間を新潟大で過ごされたのち神戸大博士後期課程に編入され、そのなかばにして本学助手に採用された。後期二年目に発表された論文「会社・株主……

文学部　専任講師　A・S・ギブズ（Gibbs）
英国のケント州出身。両親とも大学教師という恵まれた環境に育……

……昭和二十五年、奈良県の生まれ。大阪の高校を経て京都大学経済学部に進まれた。大学院も京都大学で、すでに博士課程の単位を修得されている。これまで国債問題を中心に研究されてきたが、今後……

……沢女子短期大学情報処理学科非常勤講師三年。産業心理学専攻に所属、「職業指導」を担当。研究業績、「社会的態度の研究～気質との関連について」「確認的因子分析による構成概念の不変性と普遍性～一般Factormax法による比較構造……

工学部　教授　堀江悟郎
昭和十五年京都帝国大学工学部建築学科卒業。一時期軍務につかれたが、北海道大学助教授を経て、昭和四十六年以来、京都大学教授。専攻は建築環境工学で、特に温湿度の関連に関する権威。関係の著書論文も多く、公団住宅等の基準には先生の研究成果も多く採り入れられている。工学博士。

……五月修士課程を修了、現地で建築の実務経験、専攻は建築計画学。

……昭和五十年三月、関西大学大学院博士課程の単位を修得された。……の研究。

工学部　助手　中辻　武
昭和五十五年三月、関西大学大学院博士課程を修了された。専攻……

工学部　副手　今井　清
昭和五十五年三月、関西大学工学部電子工学科を卒業、専攻は歩……に関する研究。

工学部　副手　片岡　昇
昭和五十五年三月、関西大学工学部電子工学科を卒業、専攻は航空機騒音の低音に関する研究。

奨学金

出願準備は早目に
新入生には説明会
学生部にどしどし相談を

入学式後、四月十日まで大学では新入生指導行事日程を進めるが、奨学金の出願を希望するものは早目に準備をしておくことが必要である。

▼説明会で制度全般を説明

日本育英会奨学生（一般・特奨）、関西大学奨学金、大阪府育英会、その他の地方自治体・財団等奨学生の募集はほとんど年度当初に集中する。新入生の場合は制度全般にわたってガイドが必要なので、新入生指導行事日程のなかで制度説明会が行われるから、希望者は必ず出席すること。

この説明会では、制度の概括的な説明と、本学での取扱い方法を知らせ、さらに出願を希望する学生に対して出願書類を配布し、願書の記入方法、必要書類の手続について説明される。必要書類のなかには所得証明書、高校の成績証明書など取り寄せるのに手間のかかるものがあり、注意が必要。

また、数多くの地方自治体や財団の奨学生の募集は、その都度学生部掲示板に掲示される。

▼出願資格と基準

奨学金は、だれにでも、いつでもというわけにはいかない。それぞれ目的があり資格と基準が定められている。

まず基準として、人物（奨学生として適格と認められるもの）・健康（修学に十分たえうるもの）・学力・家計がある。

とくに家計基準は、所得の種類と金額、家族構成、特殊事情など複雑な要素があるため、早合点をせず説明会等で十分に理解すること。「大学要覧」を参考にし、なお疑問があれば学生部（厚生課・第二学生課）に相談されるとよい。

資格と学力基準はつぎのとおりである。

【資格】1、日育特奨…（特に）優秀な資質を有し、経済的理由により（著しく）修学が困難なもの。

2、日育一般…特奨の（　）内の字句を削除したもの。外国人の一部も出願可。

3、関大奨…修学の熱意はあるが経済的理由により修学が困難なもの。外国人出願可。日本育英会奨学生であるものは出願不可。

【学力基準】1、日育特奨…高校最終二カ年の学業成績評点平均値三・五以上。

2、日育一般…三・二以上（特例三・〇以上）

3、関大奨…入試合格をもって基準を有するものとする。

【注】1、学業成績評定平均値＝評価値と科目数の算術平均値。

2、この学力基準は学部一年次生のみに適用する。

×　×　×

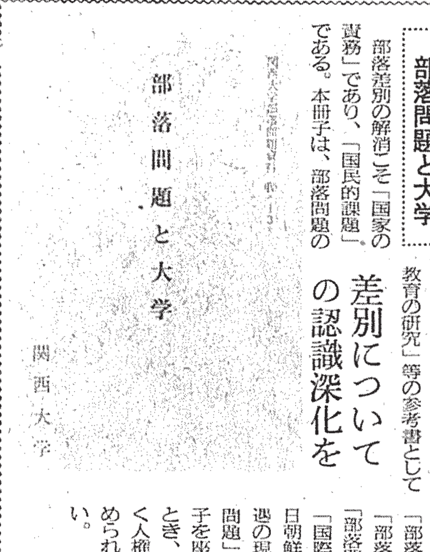
出願書類の提出時期には、交通ストなどにより日程を変更する場合があるので注意すること。

また、日本育英会特別貸与奨学生予約採用者は、ただちに厚生課・第二学生課に進学届を提出のこと。

なお、関西大学奨学金は、今年度学部新入生から貸与額、返還方法が改定される予定である。

（学生部）

関西大学部落問題資料IV—3
部落問題と大学



差別についての認識深化を

部落差別の解消こそ「国家の責務」であり、「国民的課題」である。本冊子は、部落問題の認識を深めるための手引きとして、あるいは総合コース「部落解放論」、教職課程「部落解放教育の研究」等の参考書としても役立つことを目的として編集されたものである。その内容は「部落差別の現実と大学」、「部落と部落解放運動の歴史」、「部落問題と教育・社会」、「部落問題の解決をめざして」、「国際人権規約の意義」、「在日朝鮮人の歴史的形成とその処遇の現状」、「関西大学と部落問題」とから成っている。本冊子を座右に備えて、絶えずひもとき、部落問題をはじめ、ひろく人権問題についての認識を深められんことを期待してやまない。

主な内容

▼1面　新入生諸君へ　千里眼▼2面　人事異動　新任教員紹介　奨学金について　『大学』、『部落問題と大学』紹介▼3面　総合コースについて▼4・5面　学舎案内　昭和55年度行事予定表▼6面　部落差別に深い認識を　大学生の健康と体力▼7面　「辞典」あ・ら・かると▼8面　ロンドン便り　新刊紹介　編集後記

「大学」紹介

人生の指針と教訓を
"絶対ソンせぬ"この一冊

一九八〇年度版『大学』が発行された。

昭和四十八年に創刊の新書版の『大学』は、小冊子ながら、高い格調を保持し続け、昭和五十三年までに全六冊を発行、いずれも年ごとの新入生に歓迎された。その版型と構成の改更が加えられたのは昨年。まず版型は従来の新書版からA5判二段組とし、頁数も大幅に増加。グラビアによる大学紹介も実現。また最も大きな特徴は、わが関西大学の生んだ画界の異才、故鳥海青児画伯の名作で表紙を飾ることができたこと。同時に、その絵を最大限生かすべく、表紙は白地とし、「大学」の二文字を削り、背文字のみにそれを残した。また構成面にても、新たに項目を増し、ことに大学生活の思い出を卒業生諸氏に執筆してもらったことがあげられる。幸いにも、その奇抜な表紙と、興味深い内容をもつ各エッセイは、ともに各方面から思わぬ賛辞をいただき、まずは好評を博したと言えるのも編集者一同にとっては喜ばしいこと。

新しい型の一九八〇年度版『大学』も、基本的には昨年度のかたちを踏襲し、さらに頁数は三十六頁分増加。そのことが内容の重厚さにつながっていると言えよう。もはや小冊子『大学』などとは呼べない堂々たる書となった。表紙は昨年同様鳥海氏の作品をのせることができた。氏が生前最も愛されたと聞く名作「夜のノートルダム」。今回も作品を生かすべく努められた山崎登氏の秀れたお仕事に感謝したい。

次に簡単な内容紹介をすれば、大きく、「大学とは」、「関大の歴史より」、「学問へのいざない」、「大学生活」、「青春・思い出」の五部及び関連資料として付された「学生生活実態調査の概要」からなる。

第一部でまず「大学の歴史と課題」を知る。また現学長が自らの関西大学時代の思い出と共に、新入生諸君に対する大学生としての熱い期待が語られる。

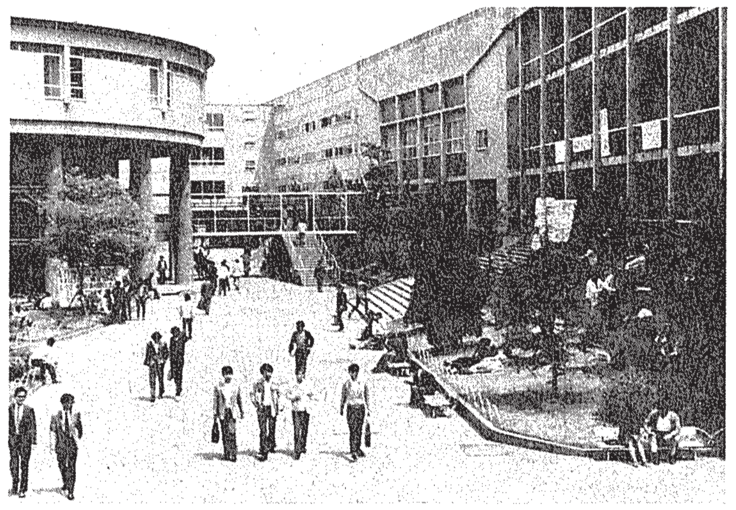
第二部では、本学の歴史上の重要な時代とエピソードが述べられ第三部は、その名の示す通り、それぞれの"学"の持つ性格を知りうる「学問へのいざない」。自分の専攻せんとする学問分野のみならず、それ以外の学問の発想と方法をもあわせて味読していただきたいもの。

第四部「大学生活」の項では、図書館、スポーツ、実験といずれも大学生活にとって関係深い事柄が述べられ興味が尽きない。また自殺を論じた文章は、人間の生き方そのものへの指針ともなろう。さらには、昨年の続きとして文庫十点をあげて読書を語る文章。この五篇は前の第三部とも合わせて、どれも個性のにじむ珠玉のエッセイ集となっている。

最後は、かつて関西大学に学んだ諸先輩の語る青春時代の記録。いずれの文章も、若き日の生に対する情熱と邁進が読み手にせまる。

以上、簡単な紹介を行ったが、一人でも多くの人たちに読んでいただきたいもの。あわせて感想なども知りたいもの。今年も"絶対ソンせぬ"『大学』である。

総合コースについて



広い視野を養う
学問の壁を乗り越えて

教養部長　田中　昭平

関西大学では一般教育科目に総合コースという講義が開設されている。この講義も開設されて以来六年あまりの歳月を経てすっかり定着しているわけだが、あるいは新入生の諸君の中には、講義の名称が目新しいので、履修科目の選択に当たって戸惑いを覚えている人がいるかも知れない。

総合コースは学問研究の学際化に則して生まれた講義であって、ある学問分野の壁を乗り越えて、あるいは、いくつかの学問分野にまたがる諸科学が協力し合って、問題を究明し解決していこうとする講義のことなのである。つまり平たく言ってしまえば、従来から存在している学問分野に囚われないで、広い視野から学問を見詰めたり、問題の解決を図ったりしてゆこうとする講義なのだ。

たとえば、履修科目一覧表の一般教育科目の欄を御覧願いたい。一般教育科目は、人文科学分野、社会科学分野、自然科学分野と大きく三分野に分類されていて、哲学、倫理学、日本史、世界史等は人文科学分野に、政治学、社会学、経済学、社会思想史等は社会科学分野に、数学、物理学、生物学、地学等は自然科学分野に配当されている。

総合コースは、こういう分類の方法に何も異議を唱えようとして開設されたものではない。この分類の仕方はそれなりに結構なものであるし、その中に納まった各学問も立派な学問なのだ。しかし、学問の中にはこのような分類の垣根の中で安住できない性質のものもあるし、系列分野のしがらみが解決を遅らせる問題もあるのだ。

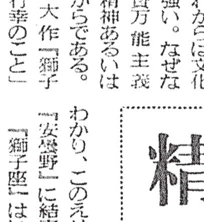
そもそも、学問の研究は深化の度合に比例して専門化するものであり、専門化は更に細分化を促す傾向があるものだ。これが学問をずいぶん発達させてきたことは否めない事実である。研究対象を細分化し深化させた高度な専門研究は、それなりに、科学の進歩発展に大きな貢献をしてきている。しかし、その研究が更に完成度の高いものになっていくためには、細分化され専門化された高度な知識の総合化が是非とも必要とされる。有機的統一体としての専門知識の総合化、これこそが学問研究の当然の帰結として求められるものなのである。

ここで一つ、日常我々の周辺で多発する交通渋滞という身近な例をとりあげて考えてみよう。交通渋滞を解決するために建設する高速道路は環境破壊、排気ガス公害、騒音公害等新たな問題を必ず惹き起こす。道路建設の主体たるべき土木工学は、それ自体いかに進歩し、いかに発達しようとも、とても独力でこれらの問題を処理する力を持ち得まい。ここで必要とされるのは諸科学の結集した力であろう。化学、機械工学、衛生医学の参与は勿論のこと、農業のことも考えなければならないし、歴史的なものへの配慮、経済面からの考察、法知識の運用も求められる。

一つの現象問題を解決しようとする研究は、その側面において、他の諸科学の研究と深く結びついている。単なる一つの課題解決だけでは不十分である。勿論、一つ一つの課題の深い専門研究が大切であることは論を俟たぬ。同時に、それを基にして、多面的な視野から多元的に眺め考えてゆくことも大切なのだ。

以上のような理念に基づいて、本学では、本年度、総合コースとして「部落解放論」、「現代文化と未来」、「大阪論」の三テーマが開講される。鋭い高度な専門の学識を基調として展開される多角的、多元的なアプローチは、必ずや学生諸君の旺盛な知識欲を満たしてくれることと信じている。

（文学部教授）



科学的な認識を

テーマ代表者　田宮　武　**部落解放論**

「部落解放論」は今春で七年目をむかえる。開講の一年のちに総合コースの一つになっているので、それから数えてもすでに五年間の歩みを持つことになる。

「部落解放論」が開講された背景をふりかえってみると、関西大学が部落差別の問題と差別からの解放という国民的課題にほとんど取り組んでこなかった怠慢に対する自己批判にもとづいて生まれてきたものである。当時、学舎のトイレの中で露骨な部落差別の落書きがあいついで発見されるとか、教員による「寝た子を起こすな」式の発言も行われるとか、いくつかの差別事件が起こった。

こうした事態に対して、部落出身学生や部落解放を自分の課題にしようとしている学生の中から、大学に対してきびしい批判と要求が提起されたわけである。その一つに「一般教育科目に『部落解放論』を設置せよ」という要求があったのだが、こうした批判を受けながら、「まさしく大学はその社会的使命からして教育と研究の総力をもって、部落問題解決のために、寄与すべきものである」との決意表明をするにいたった。

このように部落解放への学生の願いと大学の主体的な取り組み姿勢から開講されたものであるが、この五年間の歩みの中で、残念なことであるが、いくつかの講義が受講生に誤った認識を与えたり、差別観念を助長したりするという批判を受けたことがある。そのたびに、改善の努力をつみかさねてきたわけであるが、今年度は三人の担当者が原則として毎時間とも授業に出席すること、そのうち一人が講義を分担する形で授業をすすめることなどの方針を決めている。受講生からも活発な質問や意見が出されて、担当者といっしょに議論していくようなことになると、有意義な内容になるのではないかと思っている。

今年の講義で取りあげる主だったテーマを紹介してみると、①部落差別とは何か、②差別事件と基本的人権、③部落問題と表現、④部落解放と人間の変革、⑤部落の歴史と解放運動、⑥部落解放とは何か、などである。一年間の講義をとおして、被差別部落に生まれた人びとが、どれほど現在の社会の中で人間として生きていく基本的人権を侵害されているのかという差別の実態や部落民がどのような思想にもとづいて差別からの解放運動を闘ってきているのかという部落解放のすじみちを明らかにしようと意図している。

大学にいたるまでの学校教育の中で、同和教育とか解放教育を学んできたものはさらにひきつづいて「部落解放論」を受講して深く考えていってほしいし、またいままでまったく部落差別の問題についての教育を受ける機会に恵まれなかったものは、このさい「部落解放論」をすすんで受講して科学的認識を持つようにしてほしいと思う。さらにつけ加えると、そうした認識と知識がこれからの大学生活や日常生活の中で、諸々の差別を見抜く眼を持つことにつながり、また差別を許さない力を持つことにつながるように期待したいとも思う。

「部落解放論」は開講以来、年二回の特別講座を開いている点が大きな特色になっている。部落に生まれたことによってきびしい差別の状況におかれている人びとが、どのようにして部落解放をおしすすめる人間になっていったのか、主として部落の人びとの生き方と思想に直接にふれて、学んでいこうというネライを持った講演会である。受講生はこの特別講座に出席したあとで、その感想文をレポートにして年一回提出するように決めている。受講生でなくても、特別講座に出席できるので、多くの新入生が参加してくれるとよい。最後に、できるだけ多くの受講生がこの「部落解放論」の内容を真剣かつ真面目に受けとめられるように期待したいと思う。

（社会学部教授）

精神の優位が復権

テーマ代表者　中農　晶三　**現代文化と未来**

わが国の文化はいま転換期を迎えている。われわれの経済生活が、高度成長から低成長時代に移行するのを余儀なくされてきたように、文化もまた二十一世紀に向かって新しい橋を渡らなければならない。

高度成長は地球上の資源有限という事実の前に、もろくも崩れ去った。銅、ボーキサイト、木材、ことに石油、天然ガスには限りがある。OPECの会議で原油が値上げされるたびに、諸物価が高騰するだろう。新春の日本エネルギー経済研究所の発表によると、今年の中ごろには原油一バレル三二～三三ドル台、昭和六〇年には五〇ドルにハネ上がり、同じく六五年には九〇ドルにハネ上がり、わが国の経済にとってきわめて大きな負担になると、予測している。

もはや高度成長という神話がふたたび復活する可能性はない。いままでの社会は経済の動きにつれて変動したが、これからは文化に先導される公算が強い。なぜなら高度成長時代の物資万能主義は、影をひそめて、精神あるいは魂の優位が復権するからである。

『安曇野』に次ぐ大作『獅子座』の第一部「賀茂行幸のこと」を最近発刊した臼井吉見は、敗戦の昭和二十年八月十五日に、日本のみじめな近代、えせ近代がわかり、このえせ近代化の正体を『安曇野』に結実した。『獅子座』はいわばその続きであって、「近代ならざる近代を生み出したもがきなり、あがきなり、どうしてこんなものになったかを書きたいと思って始めたんです」と語る彼は、「封建制の崩れるのがもっとゆっくり、確実だったら、あんなひどい天皇制が成立しなくてもよかったのではないか、という考えがぼくにはある。だから、もっとタチの悪いものが、近代の名のもとに生まれてきたと思うのですが、どうでしょう」と述懐している（朝日新聞朝刊　昭和五十五年二月二十四日）。

明治以来わが国は富国強兵、殖産興業を旗印にして、近代国家になるために、ひたすら近代化、工業化を目指し、文化もまたその路線の上で揺れ動いてきた。暗いサタンのような工場を建設することから出発した、近代化という巨大な歯車装置に巻きこまれて、あやつり人形、ロボット的人間がたくさん生まれてきた。

人間が機械の小さな歯車の一部になるような社会では、文化もまたきわめて素朴な知的白昼夢から生産される。レディメード文化の大量生産と大量消費、そしていとも簡単な使い捨てである。

いやおうなく脱石油時代に突入して行くわれわれは、ものの使い捨てをつつしみ始めている。文化もまた使い捨ててはならないし、大量消費向きの安っぽい文化を育ててはならない。

せめて水割りされた文化のなかから、文化本来の姿を求めて、新しい橋を渡る努力が必要である。橋を渡りきるためには、単一の専門分野だけでは、とうてい手に負えないので、各領域の先生が協力し合うことになった。

哲学、文学、経済学、社会学、自然科学の専攻者が、一年余りの間、毎月一回のペースで研究会を開いて討論を繰り返し、その結果をそれぞれが担当するテーマにまとめた。

テーマの内容は大別すると「管理社会と文化」、「外国文化と日本」、「科学と文化」の三つにわかれるが、さらにそのなかで十人の先生方が、それぞれ個別のテーマを展開される。これからのわが国は、世紀末特有の暗い状況に追いこまれて行くだろう。そういった状況から浮上したいと願う学生諸君の聴講を歓迎する。

（社会学部教授）

愛すべき町大阪

テーマ代表者　津川　正幸　**大阪論**

昭和四十五年万国博開催の仕掛人、池田小太郎こと堺屋太一氏は八〇年代に向けて、次の大阪の行事は「大阪築城四〇〇年」と銘うった事業だといっている。

「これからの大阪は何を持ったらエエか。それは現代興りつつあるカルチャーで、産業と結びついていて、しかも芸術としてはまだ定着していないもの。産業文化やネ。例えば、ディスプレー・デザイン、これの世界的中心になったら、よろし」。「おカネもかからんし、もうかります。ハードは、道でもなんでも、いまあるもんをすべてエエと考えたらエエ。いまの大阪には、欠点ばかり見ようとする悪いクセがついている。アホな大将には味方の悪いとこばっかり見えるし、カシコイ大将にはエエとこばっかり見える。いまあるもんを、肯定的に理解して使うのが名将です」（毎日新聞・三月十日刊・二一面、「アップ関西」欄）

とはいうものの、今の大阪城は昭和六年再建、名将のやった万国博のあとで、大阪に残ったものは何か、大阪の未来像を描くにも、そんなこんなの為にも「大阪論」は必要になってくる。

二月十八日の「アップ関西」で津川正幸は、〈地方の時代をどう生きぬくか〉の問に、「地方の時代というても、中央にいろいろ陳情して、カネよこせと、いうようなことだけでは、うまいこといかん。自助の精神、というか、自分で基礎をかためていくことを、おたがいに考えなおさないかんのじゃないか。まあ、そのためにも、地域社会を理解して、そこに何の問題があるんかということを、われわれがもっと早く気がついて、やらなければ」と話した。

「大阪論」とは一体何の事や。要するに、大阪のエエこと、ワルイこと、自然環境、宗教・教育・歴史・文化・芸能・経済・行政の各方面にわたって、ありのままの大阪、自ら捨てたもの、止むをえず失ったものなどを理解する為の手ほどきの講座である。

今は昔、貞享五年（一六八八）井原西鶴の生きた大阪は、「惣じて北浜の米市は、日本第一の津なればこそ、一刻の間に、五万貫目のたてり商も有事なり。その米は、蔵々にやまをかさね、夕の嵐朝の雨、日和を見合、雲の立所をかんがへ、夜のうちに思ひ入にて、売人有、買人有……難波橋より西、見渡しの百景、数千軒の問丸甍をならべ、白土雲の曙をうばう、杉ばへの俵物、山もさながら動きて、人馬に付おくれば、大道轟き地雷のごとし」、淀屋全盛の米市、のち一手千両の花をさかせた堂島の米市もいまはない。はたまた享保五年（一七二〇）近松の心中天の網島…名残の橋、「君を紊ひて大宰府へたった一飛梅田橋、跡追松の緑橋、別れを歎き悲しみて跡に焦る〻桜橋」と蜆川の西から東に架かった橋もいまはなく、十返舎一九の膝栗毛の、「殊更花の春は淀川に棹さして、さくらの宮に遊び、夏は難波新地の納涼に蛍をかり、秋はうかむ瀬の月、冬は解船町の雪見色」と書かれた雪月花の風情もない。

どういうこっちゃ、大阪はないものづくしか、と叱られそう。いやある。まず、大阪で一番古い大学、それは関西大学である。

山根徳太郎博士の執念によって発掘された難波宮の遺跡、古い伽藍様式を残す四天王寺、大阪城の石垣、難波別院、津村別院南北両御堂など建造物のみならず、水の都の面影も、煙の都大阪、南部大阪の名をはせた商工業都市大阪は地盤沈下といわれようと健在である。愛すべき大阪を理解されよ。

おわりに、町人の、町人による町人のための教育機関＝懐徳堂の壁書にならって、「書物持たざる人も聴聞くるしかるまじく候事。但叶わざる用事出来候はゞ、講釈なかばにも退出これあるべく候。」選択受講・出席欠席は御随意に」。

（経済学部教授）

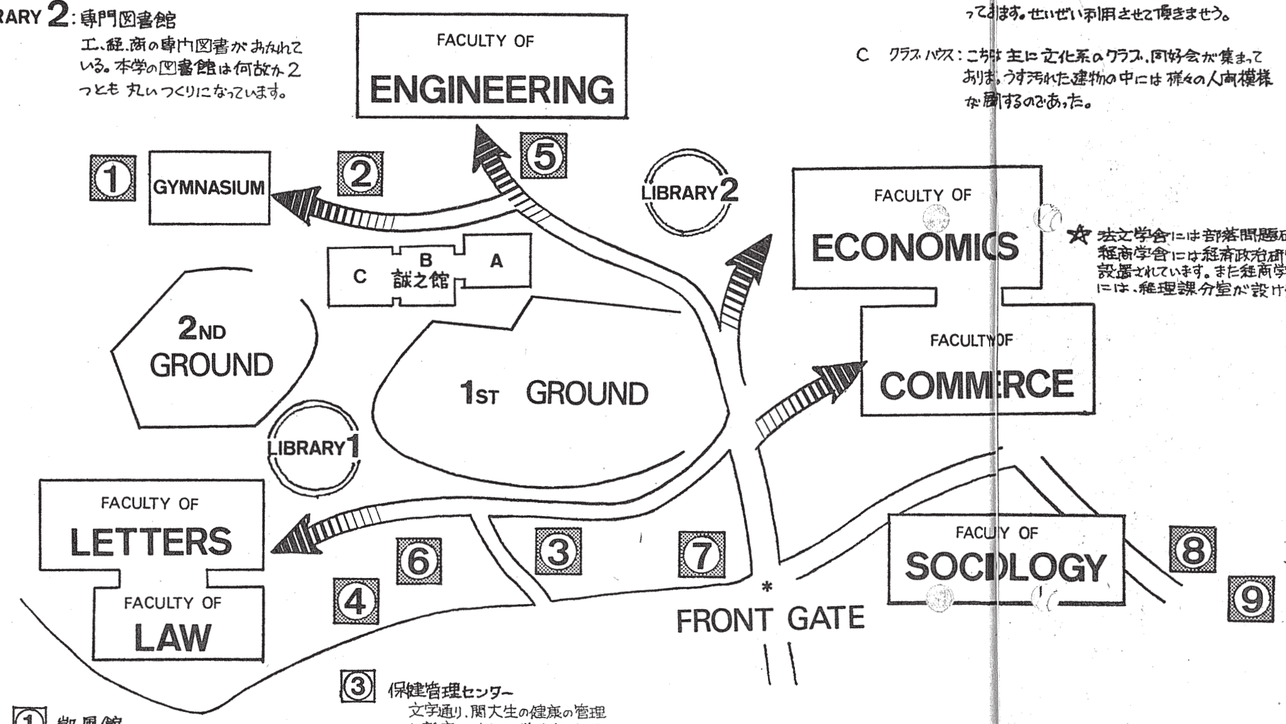
Congratulations on your Entrance!

千里山

LIBRARY 1：図書館本館
蔵書 60万冊と、その数を誇る。関西でも指折りの規模、特に法、文、社の方御利用下さい。

LIBRARY 2：専門図書館
工、経、商の専門図書があつめられている。本学の図書館は何故か2つとも丸いつくりになっています。

誠之館：たぶん四年間、一番お世話になる有難いところです。
A　CO-OP：生活協同組合のこと、食堂、喫茶、購買等の幅広い活動で、皆様の明るい暮らしづくりに御奉仕しております。なんといっても安いのがとりえ！
B　学生部：バイト、下宿、奨学金等のことはここで取り扱っております。せいぜい利用させて頂きませう。
C　クラブハウス：こちらは主に文化系のクラブ、同好会が集まっております。うす汚れた建物の中には様々の人間模様を展開するのであった。



☆法文学舎には部落問題研究室、経商学舎には経済政治研究所が設置されています。また経商学舎の入口には、総理課分室が設けられて居ます。

① 凱風館
体育会がクラブハウスとして使っております。

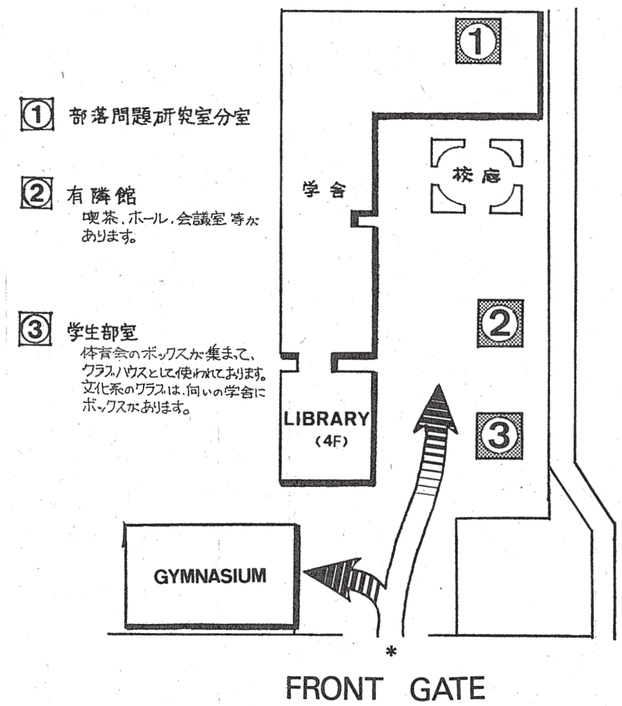
② 特別講堂
常打ちの演芸場。映画、芝居、コンサート等のプログラムは非常にユニーク。また客席のうらぶれた雰囲気がたまらない。！

③ 保健管理センター
文学通り、関大生の健康の管理と診療にあたる。学生証を持ってゆけば診てくれます。

④ 岩崎記念館
大学院、東西学術研究所、考古学資料室からなる。名前を聞くだけでなんともアカデミックな気分になるではありませんか!?

⑤ 工業技術研究所
⑥ 大学院ホール
⑦ 西村食堂（以文館）
⑧ 關大学会館
⑨ 梅南会館

天六



① 部落問題研究室分室

② 有隣館
喫茶、ホール、会議室等があります。

③ 学生部室
体育会のボックスが集まって、クラブハウスとして使われております。文化系のクラブは、向いの学舎にボックスがあります。

ART DESIGN GROUP

昭和55年度行事予定表

◇……学務関係……◇

【昭和55年】
4月1日　学年始　前期開始　学部在学生・成績発表・各種届出手続（7日まで）
7日　大学院在学生成績発表
8日　学部入学式　学部新入生指導行事期間（10日まで）
10日　大学院入学式
11日　学部授業開始　大学院履修届受付（12日まで）
14日　大学院授業開始
30日　大学院修士論文計画書（9月期修了）提出締切
6月5日　本大学規格記念日
6日　大学院外国語学力認定試験出願受付（9日まで）
20日　大学院外国語学力認定試験
7月1日　夏期休業（8月31日まで）
31日　大学院修士論文（3月期修了）提出締切
9月18日　学部（十）前期授業終了
19日　学部（十）前期試験（30日まで）＝予定
22日　学部（文科系）前期授業終了
24日　学部（文科系）前期試験（30日まで）＝予定
27日　大学院修士記（9月期修了）授与式
29日　学部前期末試験（30日まで）
30日　学部前期終了　大学院前期終了
10月1日　後期開始　授業開始
16日　大学院修士論文計画書（3月期修了）提出締切
11月4日　本大学創立記念日
5日　大学院外国語学力認定試験出願受付（8日まで）
20日　大学院外国語学力認定試験
12月21日　冬期休業（1月7日まで）
【昭和56年】
1月16日　大学院文科系研究科修士論文（3月期修了）提出締切
22日　学部後期授業終了
23日　学部学年末試験（2月20日まで）＝予定
31日　大学院授業終了
2月9日　大学院学年末試験（14日まで）
28日　大学院学位研究科修士論文（3月期修了）提出締切
3月2日　大学院修士論文面接試問・公聴会（7日まで）
10日　大学院博士課程前期課程・修士課程修了者発表
25日　学部卒業式
27日　大学院修士記（3月期修了）授与式
31日　学年終　後期終了

◇……就職関係……◇

4月1日　「求職票」配布（6日まで）
14日　就職説明会〔第1部（法学部・文学部・社会学部）第2部（全学部）〕
15日　同　右　第1部（経済学部・商学部・社会学部・工学部）
17日　英文タイプ講習会（第1回）開始（5月24日まで）
20日　就職模擬試験実施
20日　大学院外国語学力認定試験
21日　「求職票」受付　第1部〔法学部・経済学部・社会学部〕
22日　同　右　〔第1部（文学部・商学部）第2部（全学部）〕
5月7日　就職（学内）面接開始（6月6日まで）
中旬　「就職製覧」頒布
27日　英文タイプ講習会（第2回）開始（6月30日まで）

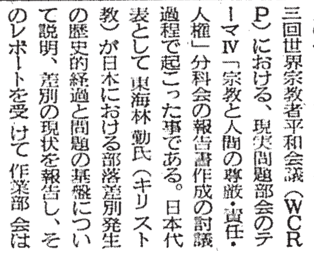
◇……厚生課関係……◇

【昭和55年】
4月1日　日本育英会大学院予約採用者推薦書提出
9日　奨学金制度説明会（経・商・工新入生）
10日　同　右（法・文・社新入生）
11日　日本育英会〔奨学生募集説明会〕大学院生〔関西大学〕〔2～4年次生〕
14日　日本育英会学部予約採用者手続説明会（新入生）
中旬　各種地方自治体・財団等奨学生募集開始（5月下旬まで）
日本育英会〔奨学生出願者仮面接＝願書提出〕関西大学
アルバイト登録票交付開始（5月末日まで）
2～4年次生の下宿紹介開始（12月下旬まで）
5月1日　アルバイト登録受付開始（6月末日まで）
上旬　日本育英会奨学生の奨学金受給資格確認
日本育英会〔奨学生出願者（2～4年次生）推薦選考〕関西大学
日本育英会〔大学院予約採用者面接〕大学院生
日本育英会奨学生出願者（大学院生）推薦選考
中旬　日本育英会〔奨学生出願者（1年次生）本面接〕関西大学
日本育英会奨学生（学部予約採用者）採用説明会
6月中旬、下旬　日本育英会奨学生出願者（2～4年次生）推薦選考
7月上旬　同　右　日本育英奨励会の合同キャンプ
9月上旬　日本育英会奨学生出願者採用説明会（特奨・一般＝学部・大学院）
中旬　日本育英会奨学生募集（1年次第2次募集）説明会
関西大学奨学生出願者採用説明会
下旬　日本育英会奨学生（大学院予約採用）募集説明会＝予定
10月初旬　日本育英会奨学生の奨学金受給資格確認
上旬　日本育英会奨学生出願者（1年次第2次募集・大学院予約採用）仮面接＝願書提出
中旬　同　右本面接
下旬　同　右推薦選考
11月下旬　日本育英会奨学生返還説明会（最終年次生）
12月上旬　日本育英会奨学生返還届提出
21日　思誠山の支年末年始特別利用取扱期間（56年1月7日まで）
【昭和56年】
1月上旬　在学生の下宿紹介中止（新入生の受入準備のため4月上旬まで）
中旬　日本育英会奨学生の奨学金受給資格確認
日本育英会奨学生出願者（1年次第2次募集・大学院予約採用）採用説明会
2月中旬　新入生の下宿紹介開始（4月上旬まで）
学生資入寮希望者募集要項の公告
入寮出願者の第1次選考＝書類選考（新入生のみ）
3月中旬　入寮出願者の第2次選考＝面接・健康診断
下旬　同　右

◇……保健管理センター関係……◇

4月14日　学部第1部・大学院男子学生健康診断（4月20日まで）…千里山体育館
4月23日　学部第1部・大学院女子学生健康診断（5月1日まで）…保健管理センター
5月14日　学部第2部男子学生健康診断（8日まで）…天六体育館
9日　学部第2部女子学生健康診断（10日まで）…天六第二診療所
13日　教職員健康診断（21日まで）…千里山第一診療所
28日　天六職員健康診断…天六第二診療所

部落差別に深い認識を
あらゆる実態を正しく知り



吉田　永宏

新入生諸君、入学おめでとう。君たちは各々の出身中学校、高等学校を通じて同和教育（解放教育）を受け、様々の差別問題と取り組んできたことと思う。大学生となるに当たって、いま一度この問題を一緒に考えてみよう。

しかし、このように呼びかけると、ああまたかとか、自分は差別問題からはもう卒業したのだとか、中には部落差別などはもう存在しないのだなどと思う人がいるかも知れない。私自身、いままでにそのような声を随分聞かされてきたものである。果たしてそう言えるだろうか。

例えば、「日本に部落問題は存在しない。部落解放を理由に騒ぐ一部の人間がいるだけだ」との町田宗夫・曹洞宗宗務総長（教団執行機関の代表者）の国際会議における発言問題は記憶に新しいものであろう。これは昨年の八月二十九日から九月七日にかけてアメリカのプリンストンで行われた第三回世界宗教者平和会議（WCRP）における、現実問題部会のテーマⅣ「宗教と人間の尊厳・責任・人権」分科会の報告書作成の討議過程で起こった事である。日本代表として東海林勤氏（キリスト教）が日本における部落差別発生の歴史的経過と問題の基盤について説明、差別の現状を報告し、そのレポートを受けて作業部会は「われわれは、全ての人々に対し偏見を排除すべく努力すべきである。われわれは日本の部落民とかインドのアンタッチャブルのような人々の苦境に深い懸念を持つ。（中略）こうした人々が平等な扱いを受けるよう責任を分かちあうべきである」との報告原案を作り、町田宗夫氏はそれに対して「部落差別」問題の削除を要求する次のような発言を行ったという。

「日本の部落問題というのは今はありません。私は日本人でよく知っております。だが、この部落問題、部落解放ということを理由にしてですな、なにか騒ごうとしている一部の人たちはあるようですが、現状におきましては日本の国の中で差別待遇ということは全くありません。（中略）だからこれを取り除いて欲しいんであります。日本の名誉のためにもと思います」。更に重ねて、「部落問題というような、部落が差別されているということは現実にないんであります。ないからそういうことを書いてもらっては困る。あれば書いてもらって結構です。また私たちはそういうのをなくすよう努力しなければなりません。現実にないんですから、差別がなされていないんですから取りあげてもらっては困るということです。よろしいですか、現実にないんですから、名誉ということは、ないものをそう書かれては不名誉だということです」。

当然のことではあるが、この問題に関して部落解放同盟中央本部は松井久吉委員長の名で昨年十月三十日付で関係者に宛てて次のような抗議書を送った。重要な問題が提起されているので少し長くなるが以下がその抗議書の内容。

「第三回世界宗教者平和会議の席上、曹洞宗総長・全日本仏教会理事長の町田宗夫氏は『日本に部落差別はない』とし『部落解放を理由に何か騒ごうとしている者がいる』だけで『政府も自治体も誰も差別していない』『百年前にあったのが感情的に幾分誰かの心の中に残っているだけ』『日本の名誉のために』『部落問題は絶対削除してもらいたい』と発言し、同会議報告書から部落問題の項が削除されるという由々しい事態にいたりました。（略）発言は、日本に部落差別はないと終始し、何としても報告書から削除させようとする意図がありありとうかがえ、あまつさえ部落差別の撤廃をかかげて運動を進めている私たちに『騒ごうとしている者』という誹謗中傷まで加えて罵倒するという絶対に許すことのできない発言です。この問題は単に、表現上の誤解であるとか、認識不足であったとか、一宗教者個人の問題などではなく、広げた影響の大きさからして、町田氏個人はもとより、曹洞宗・仏教会・WCRPなどをはじめ宗教界全体として、その社会的責任が大きく問われなければなりません。（略）町田氏の発言は、こうした差別の実態・国際的な人権を一切無視し、現実に他国から指摘されておりながら、宗教界とはいえ国際会議の場で、誤まった認識を広めたまことに許しがたい犯罪的な役割を担っているといえます。また、『日本の名誉を守る』ためにこそ、部落問題をひた隠しにするのではなく、積極的な取り組みで部落差別をなくすることこそ真の日本の名誉を守ることになるのです。（略）」

この町田氏のように同対審答申をも眼中に置かない、部落差別を意図的に隠蔽しようとする行為は勿論許すことのできないものであるが、「もはや差別は存在しない」と漠然と考えている人の数は大きなものがあろう。

しかし例えば『部落地名総鑑』が依然として出回っているという事実は何を物語っているのだろう。また例えば、被差別部落出身の青年と結婚し一児をもうけた女性が夫の被差別部落出身であることを知るや夫のもとを飛び出しまるで汚らわしいものでもあるかの如くわが子にも触れようとしなくなったという長野県下での一事件を我々が知ったのは最近のことである。「もはや差別は存在しない」などという安直な生半可な認識にとどまっていないで、部落差別を中心とする全ゆる差別の実態がどのようなものであるかを正しく知り、差別の構造についての認識を深め、差別意識が自分自身の中にどのように存在しているかを鋭く見つめねばなるまい。大学生となった諸君にはその作業と是非取り組んでほしいと思う。その意味で、解放への取り組みは一人一人に自己変革を迫り、自らを解放する営みに他ならないものと言えよう。

毎日新聞の八木晃介記者は、「普段は善良で寛容な人が突如として、しかもほとんど無意識のままに差別のキバをむく、それがもし〝世間〟というものであるなら、世間は差別の加害者であると同時に被害者でもあるといえる。加害と被害の重複する〝世間の論理〟をつき抜ける視点を求めて、私は何といわれようと人間の本質的平等性を訴え続けたいと考える」と述べている（同紙、七九年十二月八日）。本来、貧しい者は部落の内外を問わず共に手をつないで幸福の実現のために力を合わせるべき共通の立場に立っている筈のものであろう。その両者の本来あり得べき協力と団結を阻害するクサビとして打ちこまれているものこそ、差別の本質であり、部落解放同盟はそれを「沈め石」と呼んでいる。いわゆる〝ネタミ意識〟に基づく〝逆差別論〟という内容のものについても、この際深く掘り下げてみる必要があろう。被差別部落の生活環境の改善に対する「憎悪の念」は、自らの貧しさの意識面への反映であることは明らかである。「自分よりも下位の者を見出して、それを見下し差別することによって自己の存在証明を得ようとする傾向」という八木氏の指摘を私は肯定する。

本来は共通している筈の利害を恰も相反しているかの如く錯覚させるもの、それが〝差別〟であろう。その構造を知り、自らをも他をも同時に解放して行く人間的な崇高な営為。その道に君たちも加わってほしい。（文学部助教授）

大学生の健康と体力
貴重な生活の基盤
定期健康診断必ず受けよう

平原　豊弘

健康と体力の問題は、今や世界の工業先進国にとっても重要な共通の課題である。

現代社会で何故これ程まで、この問題がクローズアップされるのだろうか。十八世紀後半から十九世紀にかけて、イギリスに端を発した産業革命を機に形成され、今日なおもたゆまぬ技術革新の継続の中で醸成された近代機械文明社会の成立過程における所産とも言えるだろう。

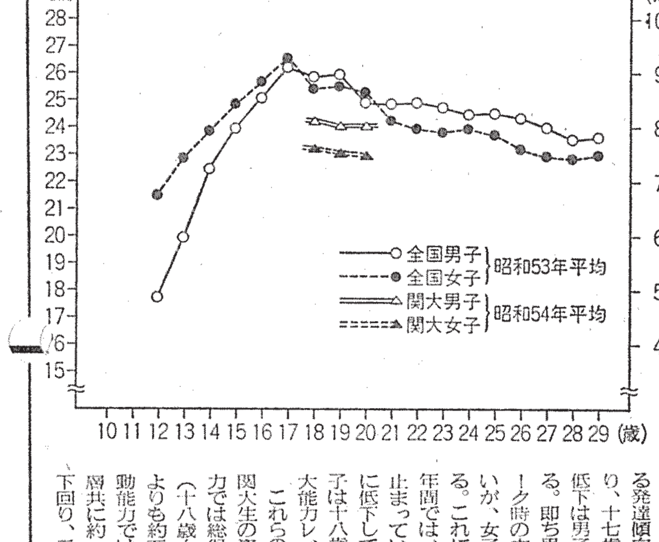
労働の機械化による省力化は確かに豊かな物質文明社会を我々に与えてくれたが、一方では、水、空気の汚染、運動不足による体力の低下やストレスなど、凡そ人間生活にとっては悪条件揃いで、このまま放置し得ない危機さえも孕んでいるのである。

「生命あってのもの種」と言う諺がある。まさに我々の人生にとって「健康と体力」は貴重な財宝であり、生活の基盤でもあるという事を改めて認識すべきである。

〈青少年の健康と体力の現状〉

文部省体育局の昭和五十三年度の体力・運動能力調査によれば、青少年（十二歳〜二十九歳）の体力は総得点で男女共ほぼ十七歳〜十八歳（高校後期）までに急激な発達を示す。十八歳以前にみられる発達傾向は男子の方が急激であり、十七歳〜十八歳以後の体力の低下は男子の方がゆるやかである。即ち男子の場合は十二歳でピーク時の六八％にしか達していないが、女子では八四％に達している。これに対してピーク後の一〇年間では、男子は九二％の低下に止まっているが、女子では八九％に低下している。運動能力でも男子は十八歳で、女子は十六歳で最大能力レベルに達している。

(体力診断テスト合計点)



これらの資料と正課体育測定の関大生の資料とを比較すれば、体力では総得点で男女共に各年齢層（十八歳〜二〇歳）では全国平均よりも約五％〜一〇％も低く、運動能力では総得点で男子は各年齢層共に約一〇％〜一八％と大きく下回り、二〇歳代が最も低い値を示す。全国平均に優るのは、女子の十八歳と十九歳のみで二〇歳では大きく下回る。

種目別にみて全国平均より優るのは、男子の投力と女子の懸垂と持久走のみであり、男子の懸垂と持久走に至っては、五歳から一〇歳近い加齢の低値を示す。

この資料の傾向をまとめていえば、高校から大学への移行期に大きな体力低下が考えられるのである。

一方学生の健康面であるが、大学の保健管理センターの年間計画の中で、毎年春秋二回の定期健康診断が実施されている。ここ二、三年間の傾向をみて第一に挙げられるのは、学生の健康への関心度としての受診率を捉えてみると、毎年新入生と四年次生の受診率は約九〇％と平均して良いが、二、三年次生の受診が非常に悪く、全体を通して七〇％弱を繰り返している。この様に折角の健康チェックの機会を与えられながら、自ら放棄する学生が非常に多いのは誠に遺憾である。

次に疾病の傾向であるが、過去の健康診断の対象の主体であった結核に代わって、成人病系列の疾病が注目されてきた事である。これについては「厚生統計」でも分かる様に、〇歳〜十四歳には呼吸器系の疾患が多く、十五歳〜四十四歳では消化器系、性尿器系、精神障害、循環器系等の疾患が急激に増加していることからも理解できるだろう。

ここ二、三年間の健康診断の集計からみて、件数の多いものから順にあげると、心臓、腎臓、胸部、糖尿、肝臓の順で、全体を通した比率こそ低いが、毎年七％前後、七十％弱の受診率で、七百名前後の学生が二次的検査の対象となっている。幸い要注意観察者および要注意医療者の数はごく少数であるが、今後、自己の健康管理の態度如何では決して予断を許さない状況であると考えられる。その他センター内の相談室を訪れる悩みを抱えた学生の数も案外多いことを付け加えておく。

体力低下の傾向と平行するかの様に、新入生中浪人の占める割合が毎年増加する傾向も注目されている。今年は合格者の六四・五％（昨年五六・七％）と報告されている。

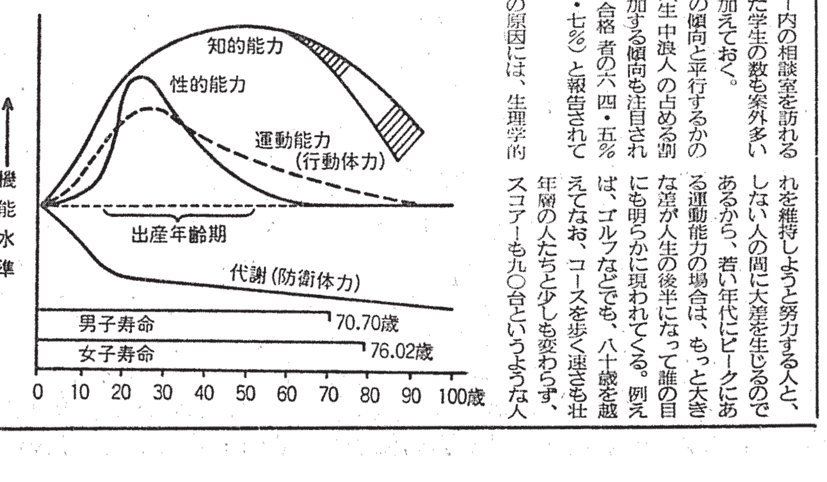
体力低下の原因には、生理学的に発達途上の最も重要な時期に受験勉強を強いられ、肝心の運動刺激を奪われた事、体格の加速度的な発育に対して体力や精神面の未成熟による身心の不均衡や各種ストレスの蓄積、栄養面の向上と代謝との不均衡による肥満などが考えられるが、低下したそれらのハンディを如何に克服するかが今後の課題であろう。

〈運動不足から起きるもの〉

付図は人間の各種能力の加齢による諸機能の変化を示したStieglitzの生命曲線であるが、これを参照すれば身心の老化ということがよく理解できると思う。

運動機能をはじめとする諸機能の低下（老化）は二〇歳代には始まることが分かる。この中で知的能力だけは他のパターンと違ってピークは中高齢期にやってくる。もっともこれも一概には言えない。例えば、一流の政治家や学者が七〇歳や八〇歳の年齢になっても高い水準を保っている様な例もある一方、壮年であるにも拘らず「若い者にはかなわん」と、自分の能力の発展をあきらめてしまう人もいるからである。ピークが中高齢期にある知的能力でさえ、これを維持しようと努力する人と、しない人の間に大差を生じるのであるから、若い年代にピークにある運動能力の場合は、もっと大きな差が人生の後半になって誰の目にも明らかに現われてくる。例えば、ゴルフなどでも、八十歳を越えてなお、コースを歩く速さも壮年層の人たちと少しも変わらず、スコアーも九〇台というような人もいる程である。ことほどさように、老齢期の人にも体力面でかくしゃくたる人がいる一方、逆の場合もあることは、われわれも常に見るところである。

加齢に伴う諸機能の変化
――Stieglitzの生命曲線――



筋力や呼吸循環機能は、体を甘やかしておれば、若いうちからでも急速に低下してゆくのである。日本人の栄養状態の向上と医学の進歩は世界一の長寿をもたらしたが、如何に医学が進歩しても老後の健康は保障してくれない。病気は治療してくれるが、原因を根本から除去してはくれない。成人病は根治し難い病気であり、健康はやはり自分だけが作り出す財産である。

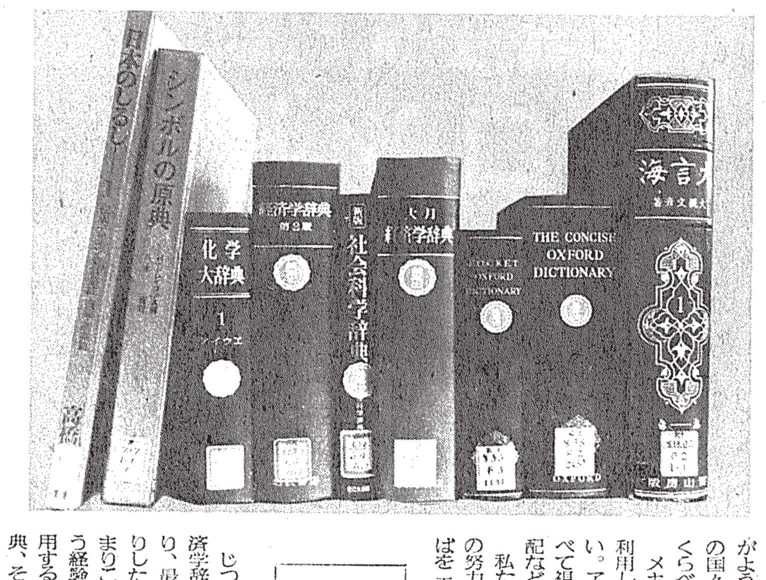
〈健康と体力は二十一世紀への課題〉

二十一世紀の地球は、天然資源の枯渇、人口の急増、食糧の危機など多くの困難な問題を孕んでおり、来世紀の中核となるべき大学生への期待は誠に大きいものがある。

大学入学を機に、諸君に与えられた重要な課題である生涯体育、すなわち「健康と体力づくり」に積極的に取り組んで欲しいものである。（文学部教授）

「辞典」あ・ら・かると

〈50音順〉



シンボルの原点

池田　進

未年があけた昨年の正月にいただいた年賀状の中に、例のウール・マークを大きく画いただけのものがあった。私たちはそれをみて、この年が未の年であることを了解できるのだから、それはただの毛糸屋のマークではなくて、一種の絵ことばである。

アメリカ・インディアンは部族間に共通の絵ことばを持っていた。ジプシーのホボ・サインは世界中のジプシーに通用する国際語である。国際交通標識のシステムがようやく欧米と日本などの一部の国々でとりいれられてきたのとくらべると驚くべきことである。

メキシコ・シティの地下鉄ほど利用しやすい交通システムはない。アクセスからゴールまで、すべて視覚表示にたよって間違う心配などまったくない。

私たちは自然発生的にも、公共の努力によっても、多くの絵ことばを工夫し利用している。ドレイファスの「シンボルの原典」(H.Dreyfuss: Symbol Sourcebook,1972)はそのような絵ことばの辞典である。もっとも著者自身は資料の不完全さを意識して、辞典とはよばず、データ・バンクとよんでいる。

この領域の専門家であるモードレーも絵ことばの索引を出している(R.Modley: Handbook of Pictorial Symbols,1976)。これは小辞典的に軽便であり見ているだけでも楽しいものだ。

日本古来の視覚表示のコレクションも実に多い。たとえば高橋正人の「日本のしるし」（岩崎美術社、一九七三）は全五巻よりなるまことに労作である。

しかし、日本の場合にはアイデンティフィケーションにかかわるデザインの収集は多いが、前二者のような、意味伝達の水準でのデザインの収集は（宗教上の視覚伝達を除いては）ないようだ。たぶんマタギや忍びには意味伝達のための独自のシンボルがあったと思うのだが。

私は形の知覚の研究が専門なので、どうしても興味が視覚言語の方にひろがってしまう。広告コピーやパッケージデザイン、看板や商標などのコレクションに目を楽しませているうちはまだいいのだが、だんだんエスカレートしてしまって、本番の仕事はそっちのけで神楽面や歌舞伎の隈取りなどにまで目がいって収拾がつかなくなっている。たとえばお化粧なども絵ことばとのつながりで見ていくことができないだろうか。（社会学部教授）

経済学辞典あれこれ

熊谷　尚夫

じつをいうと、私はこれまで経済学辞典の若干の項目を執筆したり、最近ではその編集に関与したりしたこともあるが、自分ではあまりこの種の辞典を活用したという経験がない。いちばん身近に利用するのは、何といっても英和辞典、それと国語辞典である。前者は本を読むのに使い、後者は物を書くときに使う。今もさっそく国語辞典を引いてみると、「じてん」には辞典・字典・事典の三つがある。字典はいまの場合論外として、辞典は言葉を一定の順序に並べて意味や用例などを説明した書物、事典は物・事柄の内容をしかるべき順序で説明した書物ということになっている。そして、広い意味での辞典は事典・字典をも含むという。物や事柄についての私たちの認識と伝達はむろん言葉を通じて行われるから、狭義での辞典と事典の区別もはっきりとはつけにくいようである。

わが国で経済（学）辞典と名のつくものは、大中小あわせて十種近くも存在するのではないかと思う。私が持っているものだけでも六種類ある。これらは概ね経済に関係する事柄を説明する「事典」と、経済学の専門用語を説明する「辞典」とを兼ねているようだ。たんに言葉の説明にとどまらず、目次を見ると経済学全般の領域を体系的にカバーし、索引によって特定の言葉を引くこともできる仕組みになっているのが多い。その点では、いわゆる「読む辞典」と「引く辞典」との両方に役立つことを欲張っているわけだ。経済学の理論や学説にこだわらないで、経済関連の事柄だけをザハリッヒに解説した「経済事典」というのがあってもいいと思うが、いまは適当なのが見当たらない。

辞典の有用性の基準は、おそらく、収録項目のアップ・ツ・デイトな網羅性と、説明それ自体のわかり易さにあると思う。たとえば、今日ではスタグフレーションとか一般消費税とか合理的期待とかいった項目を引いてみたいと思うひとは多いだろうし、他方で価値や資本などというありふれた項目を引いたときに、百年前のマルクス学説しか書いてないというのも困る。とにかく、経済の現実も学問も変化が早いから、辞典を作るのもたいへんだし、利用する側でも用心が肝要というわけである。（経済学部教授）

国語辞典にもの申す

山野　博史

機知に富んだ痛烈な諷刺家として知られるアメリカの作家アンブローズ・ビアスは、有名な『悪魔の辞典』のなかで、「辞書」を定義して、「一つの言語を弾力のない固定したものにするために突出された、悪意にみちた文筆関係の仕組み。とはいうものの、本辞典にかぎり、きわめて有用な製作物である」（西川正身訳）と、いかにも皮肉たっぷりに述べているが、わが国『悪魔の辞典』ならぬ、わが国語辞典は、いかがなものであろうか。

われわれは、いま、信頼できる国語辞典を持っているか。読むに価する国語辞典を持っているか。面白くてためになる国語辞典を持っているか。言葉へのあくなき情熱に支えられたほんものの国語辞典を持っているか。昨今の大変な日本語ブームのなかで、この大問題がまともに論じられたという話を、寡聞にして、私は知らない。

少し前では、「国語の辞書をテストする」（『暮しの手帖』昭四十六、早春号、一〇号）が、そして最近では、杉本つとむ監修『国語辞書を批判する』（桜楓社、昭五十四）が、管見に入るのみである。

ちまたに氾濫する国語辞典は、外見、内容のいずれにおいても、質量ともに、どれもみな、大同小異、あるいは同工異曲で、いかにも芸がなく、文体には生気が見られず、字句の説明は曖昧で、雄弁で個性豊かな記述は姿を消し、学者先生風の無味乾燥な饒舌が横行しがちで、また、引くにさえ、簡便とはいいがたいものも少なくない。このような現状認識は、国語辞典そのものに対する無理解に基づく、単なる独断と偏見に過ぎないのであろうか。私としては、むしろ、そうであってほしいと、大まじめで願っているのだが…。

さて、あれこれと愚にもつかぬ駄弁を弄した私自身はといえば、やはり大槻文彦編『大言海』（冨山房）を推す。それも、現在入手可能な一冊本ではなくて、元版（第一巻ー第四巻、昭七ー十、索引一巻、昭十二）の五冊本をすすめる。編者が、文部省の命を受けて明治八年に稿を起こし、同十九年に完成、同二十二年から二十四年にかけて全四冊を公刊した、わが国最初の近代国語辞典『言海』に、文字通り増補改訂を施したものである。自負にみちた書名といい、セピア色の表紙の装幀といい、いかにも古風で、ずっしりと重い四六倍判の大冊であるけれども、語源や出典が示されていて、読んで愉しく、使って便利な辞書である。事物のイメージをくっきりとしたかたちで喚起する、的確で精彩あふれる簡勁な文体は、実に好ましいかぎりである。繙いてみれば、全巻到るところに、若くて健康な、それだけにまた未熟でもあった、明治の青春の息吹が烈々と脈打っていることは容易に感得できるはずだが、そのたびに、何ともいえぬ大らかで懐かしい気分に誘いこまれるのは、果たして私だけであろうか。

『大言海』五冊揃で古書相場は、ここ数年二万円前後である。この辞書にはいまなお熱い新鮮な血がたぎっていることを考えあわせるならば、決して高い買物ではない、と私は思う。（法学部助教授）

競い合う辞典　経済学辞典について

吉信　粛

社会科学もしくは経済学の分野で、一昨年から昨年にかけては、「辞典」出版競争の時代であった。直接私が執筆を依頼された「辞典」にかぎっても、四冊もの新しい「辞典」が出版されており、この傾向はなお今年に入っても続いているようにみえる。このことは、いったい、何を意味しているのであろうか。察するにそれは、一九七〇年代が世界的に大きな社会変動の時代であったのであり、どのような立場をとるにせよ、もはやそれ以前の古い事実や既成の観念のみをもってしては、八〇年代を迎える新しい社会現象に対応した正確な歴史的社会的認識をうることが困難になったということを、示すものであろう。このことは、今日世界を二分する資本主義社会に対しても社会主義社会に対しても、また、経済学の二つの対立した立場、すなわちマルクス経済学にも近代経済学にも当てはまることであろう。例えば、「多国籍企業」、「第三世界」というような今では新聞や雑誌で普通にお目にかかる用語ですら、わずか十年ほど前に出た経済学辞典の索引項目に掲載されていることは稀といってよいのである。

さて、陽光に満ちた四月、新学年の開始は「辞典」の季節である。学生相手の書店の棚には語学関係をはじめとして、あらゆる分野の「辞典」がうず高く積まれる。「辞典」を手に入れようにも出版事情そのものがきわめて悪かった筆者の学んだ敗戦直後の時代と比べると、まったく隔世の感がある。希望に溢れて大学の門をくぐった新入生諸君、そして自分の一生の仕事とする専門課程の問題に真摯にとりくもうとしている諸君にとって、こうした量、質ともに充実した―中にはそうともいえないのもある―「辞典」の存在は、何と大きな励ましと導きになることだろうか。もっとも、あまりの豊富さに、その選択に一種のとまどいを感じているというのが正直なところかもしれない。

そこで、いささか手前みそになるが、筆者の関係した「辞典」として、科学的社会主義の立場で社会科学一般を学ぼうとする諸君、とりわけ新入生諸君には『新版社会科学辞典』（新日本出版社）の簡明さを、同じ立場で経済学を体系的に把握しようとする諸君には『大月経済学辞典』（大月書店）の斬新さを、マル経と近経の両分野にわたっては『経済学辞典第2版』（岩波書店）の権威を推すことによって、この小文を終わることにしよう。（商学部教授）

辞典を読む楽しみ　「英英辞典」の魅力

田中　逸郎

辞典は「引く」ものとばかり思っていた私が、「辞典を読む」ということばを驚きとともに初めて耳にしたのは大学二年の時である。しかも、それまで慣れ親しんでいた英和辞典ではなく、いわゆる「英英辞典」を読むというのだ。「詩や小説じゃあるまいし面白いはずがない」「たとえ読もうとしたって結局は英和辞典のお世話になるだけだのに」と、非常に消極的な意見しかもっていなかったのを思い出す。

そんなことを忘れかけたころに、英語にはそれを日本語におきかえると何と同意語が多いことかと、少々うんざりしてきた時期がある。「すてきな」に相当する英単語はいくつあるのか。和英辞典にだって十やそこらは載っている。これらの英単語がはたして真に同意語だろうかと疑い始めたのだ。ひょっとしたら、同意語と思っている単語の微妙な意味の違いが書いてあるかもしれないという期待をもって英英辞典に手をつけた。もちろん英和辞典のお世話になりながらである。

定義をながめては「フーン」と、英和辞典を引くよりは一層よくわかったような気になったものだ。その気持ちは今も変わらない。こうなると、あの単語はこの単語はとあちらこちら辞典をめくりたくなる。英英辞典を読む効用はこれだけではない。定義の中の知らない単語を同じ辞典で引いているうちに、英語を英語で学ぶことになる。

語源にまで目を向けると、現在の意味との関連に注意を引かれる。読む楽しみがだんだんわかってきた。これはずっと後になってからのことだが、また新たな効用を見いだした。

たいていの辞典はその時代に則した今日的な定義または語法を載せている。同名の辞典の旧版にはどんな定義があると気になりだした。旧版集めは古本屋通いの主目的の一つとなった。旧版と新版とではかなり違う。その違いを読む。これがまた楽しい。単語のストーリーがあるのだ。二十数年前に聞いた「辞典を読む」ことの意義が、今ようやく自分なりにわかってきた。電車の中や寝そべっていても読めるハンディな辞典として私が愛読するのはPocket Oxford Dictionary (POD) と Concise Oxford Dictionary(COD) である。（文学部助教授）

化学ア・ラ・カルト

徳山　泰

辞典―ジオヒクショナリか、エーッと椅子を回転させてみると私の身の回りだけで九種類もある。その中六種は専門の化学大辞典とか生物学用語辞典などである。事典まで含めると十七種にもなる。ことほど左様にジテンのお陰を蒙っている日常だが、全部役に立っているかというとさにあらず、こちらの知っていることばかりで肝心なものが載っていないものも多い。英語一つでもエリュート（溶出する）、リオフィライズ（凍結乾燥する）などふんだんにある。当然辞典を選ぶときは苦心した語がチェックポイントになり、載っていると無性に嬉しく、直ちに購入というわけである。最近二万数千円も出して買った新刊書だが全く役立たず、編集のまずさから調べようにも手に負えないものもある。

さて話を事典よりずっと広げてみよう。去年の春、ハワイの学会に行ったとき、D社出版の家庭器具修理のハウツウリペアホームウェア風のものがあった。テレビ内部の図があり、家庭での修理はここ、それ以上は専門家にと指示があり、大変興味深く感じた。しかし値が高いのと日本では役立たぬかもしれないのでやめた。

もう一つハウツウドウエニシングベターブック、これは九ドル位なので買った。実に面白い本でA―Zまでを十二色に色分けしてあり、Aはアパートメント、アートオークションなど初めてデートするときとか招かざる人がパーティーに出てきたときどうするかとか、はてはメンストラルペインを柔らげる体操とか、こう書くと何でもないようだが多くの人のアイディアの結集で、全く機智に富んだ事柄がふんだんに書いてあった。

日本に帰って来て化学に関する普及書を作るある学会の会合に出席したとき、その本はヒッポリダコだった。計画の本は化学ア・ラ・カルトとして立派に完成した。中央公論社の製作で九八〇円である。SウイスキーやドクトルマンボウでおなじみのS氏の挿絵で、漬物から色の変わるサングラス迄七十二項目、植物ホルモンの項では人間は逆さまになった植物だの、モダンガールが毛断娘と表現されたことがあるなど面白いリードに始まり、ホルモンの項ではホルモンという言葉は刺激するという意である云々という具合である。

たんに理科系の学生のみならず、ひろく一般の学生諸君の一読をすすめたい。（工学部教授）

ロンドン便り

生田靖

冬はとうとう来なかった？

ロンドンの今年の冬は平年に比べて暖かったらしい。ロンドンに長年住む人から、今年はすこし暖かいですね、といわれ、そういえば「そう冷え込まないなあ」と思いながら、いつの間にか今年の冬は終わっていた。

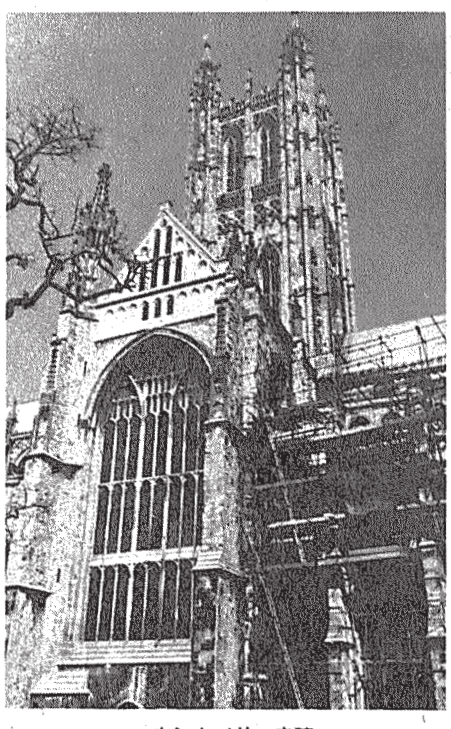
数年前にロンドン大学に来ていたある大学の先生は、ものの本につぎのように書いている。

「寒くて暗くて長いロンドンの一冬を過すためには、その前にスペインの暖かいしかも青くすみ切った空のもとで、少なくとも一週間ぐらい陽光を浴びて、越冬の心がまえをつくってくる必要があろう」。私も一時スペイン行きを真剣に考えたことがある。だがすでに過ぎる夏、アンダルシャーの農村を廻ったことと円の急落とが私のはやる心を思いとどまらせた。

そうして昨年の三月末私達一家がロンドンに居をかまえてからこの地で昨冬を経験したのみの何人かの友人、知人が私のこの素地のうえに冬の絵をかいてくれたのであった。

一年前の冬は、何十年ぶりかの大寒波の到来、毎年はあまり降らない雨が降り続く、そこへ冬の恒例の賃上げスト、あるときは輸送労働者のストが物不足の状況をつくりだし、パブリック・サービスのストで戸外にゴミの山ができた。そこへ雪がつもる。こういう殺風景なシーンを一見しただけで寒波はピンと上がるだろう。昨冬を最低条件で過ごさざるをえなかった私の少なくとも一年先輩の日本人たちは、私に冬のきびしさについて恐怖感を与えるに十分な内容をもってふき込んでくれたというわけである。

私は冬来りなばこの地で冬眠生活に入ることを心にかたくきめた。そうして暖房のきいた大学の研究室にとじこもり、本格的な寒波のお出ましを待ちに待ったのである。ところがその寒さが今年はいくら待てども来ないのである。二月中旬私はとうとうしびれを切らし昨秋まで週一回は訪れていたオックスフォード大学のある研究所まで足をのばした。所長は私の顔をみるなり「やあ、お久しぶりですね。大陸の方にでもお出かけでしたか」と皮肉げに問う。いや実はこれこれしかじかで来れなかったのですよ、と事情を説明せざるをえない。所長はカラカラと笑い「昨冬が寒すぎたのです。毎年はこんなものですよ」という。司書女史の方はイギリス人独得の笑顔で「プロフェサーイクタ、寒くなくてラッキーでしたね」、とのたもうた。そうだ、ものは考えようだ。「ロンドン、ラッキー、ウォム・ウォム」



カンタベリー寺院

選挙―議員―汚職

昨年五月三日イギリスでは下院の総選挙がおこなわれた。結果は美人党主サッチャーのひきいる保守党が労働党に圧勝、敗軍の将労働党のカラハン前首相はこの結果をみて「イギリス国民は保守党にではなく、この冬のストライキに票を投じたのであろう」と負け惜しみともとれる名言をはいた。

私は民主主義の本家ともいわれるイギリスの総選挙の実態をはじめて見聞しうる好機会に恵まれたわけだがうかつにも予備知識を全然持たなかったため、わが国のそれとの違いに驚くと共に考えさせられるところも多かった。

まず選挙運動の違いである。わが国の選挙といえば第一に何を思い浮かべるか？。候補者等が車にのって「○○をよろしくお願いします」と朝から夕までガナリ立てる様相である。少なくとも私のイメージはそこに結びつく。これに比べるとこちらの選挙は全く静かである。私は選挙運動期間中ロンドンの市内外を歩く機会が多かったのだが唯の一度もそのような選挙カーに出くわしたことがない。

候補者の選挙運動は專ら支持者を中心とした小集会に出席し支援の環を拡げることと個別訪問とである。また特定候補の熱烈な支持者は自分の家の表向きの窓に候補者名と政党名を書いたポスターをはり、道行く人々に支持を訴える場合もみられる。したがって夫妻で支持が保守と労働とに割れた場合同じ窓に両方のポスターが仲良く並んでおりどちらを支持してよいのかわからないことがある。

こういう個人の候補者の選挙運動をバックアップするのが、各党の閣僚(野党は影の閣僚になる)がテーマごとに出席、舌戦できそうテレビ討論会である。この間に各党が趣向をこらして作りあげたキャンペーン広告がスポットとして入る仕掛けになっている。これが連日連夜くり返されるから国民も各政党の政策内容を詳しく知りうる。これ以外に運動らしきものはないからキャンペーン製作費用ぐらいのもので大した選挙資金を必要としない。日本のように運動員に酒盛りをして元気をつけ、投票依頼に手土産を持たせ、当選するのに莫大な金をつぎ込む、そうしてそれが結局汚職に結びつく、ということはあり得ない。

そこへもってきて議員の歳費は驚く程安い。昨夏数年ぶりに上がって陣笠で九〇〇〇ポンド(約五〇〇万円)、閣僚でも一五〇〇〇ポンド。一般議員は一般企業の課長クラスの待遇といえようか。また日本的な汚職は当国では皆無といわれる。企業等が特定の利益を求めて議員に働きかけても効果はないし、議員もそんなことをやれば仲間からは爪はじきにされ、次回の選挙では必ず落選するという。いきおい清廉潔白とならざるをえない。もっとも百年以上の昔は、票は金で売買されていたそうだから、日本はいまイギリスの何十年遅れかを走っているのかも。

大学よどこへいく

サッチャー内閣に変わり、英国民が最初に聞かされた大学政策の第一声は「学生定員の六%削減」というきびしいものであった。これは労働党内閣の採用してきた高等教育の拡大―大学入学者数の増大政策と直っ向から対立するものである。日本の大学膨張政策にドッポリと漬ってきた私にはちょっとした驚きでもあった。イギリスの大学数はオックスフォードとケンブリッジ等を除いた外は、全部国立でありしかも全体で四十数校らきている。その理論的基礎は米国のノーベル経済学者フリードマンのマネタリズムにあるわけだが、私などはこの国の経済学の祖アダム・スミスを思いうかべてしまう。「法と秩序」を守るために軍事費と警察費の膨張だけは許すが、あとはヤレ切れ、ヤレ切れ」と鈍刀をふるう姿はチープ・ガバメント、夜警国家論と二重うつしとなるからである。

もっとも、その後「学生定員の削減」という声は聞かれなくなった。どうも学生が騒ぐとヤバイのころを加えれば、カットは容易にできる仕組みとなっている。

夏休みあけに大学政策の第二弾が発せられた。授業料の値上げである。国内の学生は奨学金が面倒をみてくれるのであまり痛くはないが(もっとも奨学金の額が問題となる。最近学生団体がこの増額要求を文部省に出し、デモがくり返されている)、問題は外国留学生の場合である。この十月からは約倍増し、文科系で年間二千ポンド(一二〇万円)、理科系で三千ポンド(一八〇万円)となる。これは大学関係者に大きなショックであった。授業料の値上げ―自費留学生の減少―大学財政の破産という論法が現実化しかねないからである。

例えばロンドン大学では外国留学者は全体の一八%(私の所属したL・S・Eでは三〇余%)、その授業料収入は大学財政の大きな基盤となっている。まず来年度は一〇%の収入減が見込まれ、どう切り抜けるか、どこにシワを寄せるべきか課題となっている。

あるプロフェサーは頭をかかえながら私に、優秀なスタッフを切れば自殺行為になるし、結局大学入学者の質を下げ、入学者数を増加し、マスプロ教育にもっていかざるをえないのでしょうか(現在は一講義二〇～三〇人程度)、と話しかけてきたことがある。彼は私から日本の大学の実情を聞いて、大きなゼッシャーで「大学よどこへいく」といった。

アイオン・サッチャーも前途は多難

「サッチャー家はサッチャー内閣と同様いまや分裂状態にあるのではないか。亡主のミスター・デニス氏はライオン(ラグビーチーム名)の南アフリカ遠征に声援を送るし、今また息子のマークは(すでに日本の新聞で報道されたように)日本の繊維産業の英国進出を応援しようとしている。母親サッチャー首相はわが国の産業の発展条件を一生懸命模索しているというのに……」。

これはこちらの日刊紙ガノアデアンにのった繊維産業地帯を選挙区にもつ労働党某議員の談話の一部である。特にマークが問題にされた英国の繊維産業は今発展途上国製品に押されて、不況の真っ只中、輸入制限の要求も出されている。そういう状態のところへこのニュースが国会をかけめぐった。

ヨーロッパで始めての女性首相として颯爽と登場し、東京サミットにも紅一点としてお目見えしたアイオン・サッチャー女史もこのところ御難続きである。最近、サッチャー内閣に亀裂がみえはじめた。首相を中心とするタカ派とハト派の対立である。超財政緊縮政策にも閣内でものいがついたふしがある。公共部門のカットにもほどほどという線があろうというもの、保守党の伝統的政策にもう一度光をあてるべきという動きである。

それに労働組合に対するタカ派的取組みに危惧をもつ閣僚、グループがあらわれてきている。選挙公約のクローズドショップ制の緩和、セカンドピケッチングと秘密投票の禁止等を強行しようとするサッチャー路線と労組との悶し合いでソフトに解決策を求めていこうとする路線との対立である。

労働党の天下時代の一年前インフレは八%、がいまは二〇%近く、失業者はこの三月に一五〇万に達した。輸出はポンド高で落ち込み、不況感がひしひしとイギリス国民をとらえている。労組はサッチャー内閣の政策に全面対決のかまえをみせ、五月にはゼネストを呼びかけている。サッチャー内閣も前途は多難といわねばならない。

(商学部教授)

スコットランドの農村調査で

BOOK 新刊紹介

文学部教授　有坂隆道編
「日本洋学史の研究（V）」
（創元社・三〇〇〇円）

某新聞の書評欄では本書の発刊を「息の長い仕事」と評したが、Iの発刊は昭和四十三年六月。ただし、この種の論文集の出版はむずかしく、書名にIを表示されなかった。それがVまで至ったのは洋学史の諸分野に及ぶ掲載論文のすべてが、ユニークかつハイレベルの緻密な実証的研究で、学界への寄与が大きかったからである。

収録の論文は、成瀬不二雄「洋風画以前の司馬江漢」、菅野陽「司馬江漢の著書『種痘伝法』と銅版『天球図』について」、海野一隆「シーボルトの『日本辺界略図』」、山本四郎「一蘭方医の生活記録―小石元瑞『日省簿』の研究―」、浅井允晶「幕末大和における牛痘法の伝播について」、田崎哲郎「神田孝平の数学観をめぐって」、有坂隆道「寛政期における麻田流天学家の活動をめぐって」の七編。

一部を紹介しよう。有坂教授は麻田剛立門下の高橋至時・間重富の往復書簡に綿密な考証を加え、寛政改暦の背景と天学家の技術・思想を追求される。旧稿を補訂されたものだが、まったく新鮮さを失っていない。驚きである。山本氏は京の蘭医玄瑞の天保十二年分の日記を紹介。その教養・日常・交友などに特色ある分析を試みられる。どの論文も実にていねいで、専門外のものにも読めるよう配慮されたのでは、と思うほどである。

（泉澄一）

文学部教授　谷沢永一
同　助教授　浦西和彦編纂
図書館嘱託　肥田皓三
「露伴全集」（別巻）
（岩波書店　上巻二八〇〇円　下巻三二〇〇円）

『露伴全集』四三巻（四一巻、別巻・付録各一巻）の刊行が、この三月十八日をもって完結した。さきに、一〇年の歳月をかけて編纂刊行し、わが国個人全集の典型として注目された初版全四一巻の、これは再刷であるが、刊行に当たって、新発見の佚文と著作年表を収め、別に一巻二冊（拾遺上・下）として補ったのが即ち本書である。

上冊には「悪太郎のはなし」他一四八篇と後記を、下冊には九二篇の作品、九一通の書簡と後記、そして「幸田露伴著作年表」を収め、終わりに「総目索引」を付す。

収録の佚文はすべてこれ珠玉、読み始めて巻を措くことができない。これだけで、掛け替えのない人露伴の一端にふれる思いがして、うれしさ一入である。

それにしてもこの幅佚の浩大さは一体何としたことであろう。四〇〇篇近い佚文を収めて世の注目をひいた『露伴遺珠』の刊行から、まだ二年にもならないのである。後記によれば、四一篇の作品が編者以外の人々から寄せられた（氏名と作品名が明記されている）とあるが、そうした例を除いても、一五〇篇から二〇〇篇近い佚文の発見である。どうして短期間にこれだけのものを見付けえたのか。恐らく、著作年表編成の作業を抜きにして考えられないであろう。

著作年表は「著書」の目録と「初出目録」からなり、前者は管見のどの目録より精確さと見易さの点ですぐれている。一二八部を録する。

特筆すべきは初出目録の作成である。全集収録作品の初出誌（紙）、単行書一六〇〇余点について、著書目録と同様尽くオリジナルを検し、書誌事項を確認しての結果である。まま見られる未確認の記載がそれを如実に語っている。いってみれば、全作品の総ざらえを行ったのである。誤りは訂正され、新事実が加えられたことというまでない。

もとより目録者にとって、オリジナルの検証は不易の鉄則である。とはいえ、これ程尨大な資料を全て当り尽したとは、まさに露伴の全作品と書誌学的にがっぷり組んだ恰好というべく、敬服のほかはない。浩大な佚文の発見は、この過程を描いて他に生まれようがなかったのでなかろうか。そう思えてならない。この別巻二冊は、さきの四一巻本という「全集」に、千鈞の重みを加えたといっても、いい過ぎではないであろう。

（森川彰）

文学部教授　横田健一編
「日本書紀研究」第十一冊
（塙書房・五〇〇〇円）

日本書紀研究会は昭和三十年ごろ、故三品彰英博士を中心に関西の若手の古代史家を集めて組織された研究会で、大阪の続日本紀研究会と並んで古代史研究の源流として学界の注目を集めてきた。三品博士亡きあとは横田教授が同会を主宰され、会員の研究成果を年報形式で世に問うてきたが、本書はその第十一回目になる。巻頭の編者序にもいうように本会の「第二ラウンド」の出発を飾るにふさわしい斬新な問題意識に富む力作九篇を収めている。ここでは紙幅の関係で、本学関係三氏の論文の紹介にとどめざるをえない。

横田健一「皇太神宮儀式帳と日本書紀」は、両書所伝の比較検討から、月神信仰の形成と神話への編入過程、皇太神宮の伊勢遷座の意義、神器と始祖期の問題などに論及した多彩な論考。文化人類学や神話学の方法論を駆使して実に多くの問題を提起している。

寺西貞弘「古代の皇位継承について」は、わが古代の皇位継承は、もともと兄弟相承を基本としたが、律令制の導入とともに直系相承をとるようになったことをあざやかに論証し、合わせて女帝や大兄制の意義に論及している。従来の通説の修正をせまる問題作である。

和田行弘「大嘗祭に関する一試論」は、古代皇室祭儀の根幹をなす大嘗祭の起源を追求した力作。ユキ・スキの卜定範囲をさまざまの角度から考察して、大嘗祭の起源を五世紀以前のアガタ制盛期に求めようとしている。やや論証に散漫な点が見られるが、考古学や民俗学の成果を積極的に取入れようとした態度は評価されてよい。

本学大学院在学の寺西・和田両新進の力作を得たことをよろこぶとともに、同会の一層の発展を期待したい。

（薗田香融）

▶編集後記◀

「関西大学通信」も昭和四十四年六月十九日発行の第一号以来、十二年のあいだ間断することなく発行し続けられて本号で第百号。この号のため特別な企画はなく、通常の新入生歓迎号と同様。記念の事業は別に計画中。特集記事には辞典を採り上げた。幾つかの辞書があげられている。一冊でもよい、実際に手にしてみるも一興。

（日下・田中）